

発掘調査報告書第704集『万木沢 B 遺跡』補遺

— 掲載遺物図の訂正と検討 —

谷 藤 保 彦

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

1. はじめに
2. 掲載土器図の訂正
3. 出土した他地域系の土器群
4. 土偶・鯨面土器図の訂正
5. おわりに

— 要 旨 —

縄文時代晩期終末から弥生時代前期の資料を多量に出土させた遺跡として、2022年3月に『万木沢 B 遺跡』（公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第704集）が刊行された。しかし、印刷入稿後、掲載遺物図に不備があることが分かった。また、刊行後に行われた出土土器の見学会には、多くの当該期の研究者が参加し、多方面からのコメントを頂くとともに、遺物図の指摘をもいただいた。

本稿では、ご指摘いただいた遺物図を含めた訂正図を示し、併せて出土土器についての若干の検討を行うことで、刊行した発掘調査報告書の補遺としたい。

キーワード

対象時代 縄文時代晩期終末・弥生時代前期
対象地域 群馬県
研究対象 土器・土偶

1.はじめに

群馬県北西部に位置する東吾妻町所在の万木沢B遺跡であるが、上信道吾妻西バイパス建設に伴う発掘調査において、縄文時代晩期終末から弥生時代前期の資料を多量に出土させた遺跡として、2022年3月に『万木沢B遺跡』（公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第704集）が刊行された。しかし、印刷入稿後の遺物収納作業中、掲載遺物図に不備があることが分かった。また、刊行後に行われた出土土器の見学会には、多くの当該期の研究者が参加し、多方面からのコメントを頂くとともに、遺物図のご指摘をいただいた⁽¹⁾。

掲載遺物図の不備を是正するため、本稿ではご指摘いただいた遺物図を含めた訂正図を示し、併せて出土土器についての若干の検討を行うことで、刊行した発掘調査報告書の補遺としたい。

2. 掲載土器図の訂正

報告書掲載土器図の訂正にあたっては、本稿の図1～3に掲載図と遺物No.と共に示した。以下に、図の訂正内容と土器観察を記す。

(1) 図1の訂正図の土器

第58図261は、天地逆で報告したため図を訂正した。甕ないし壺形土器の体部中位で、色調は鈍い褐色をなし、器厚が薄く、硬質。体部にやや太い斜位の条痕文を施すが、体部上半と下半で方向が異なる。内面は横位のナデ調整。また、外面には煤が付着する。

第61図289は、復元線を示した図であったが、改めて図を取り直した。口縁部に6単位の双頂となる波状突起を有し、短い口・頸部は研磨の施された無文で、頸部下端は頸部側がやや低い段となる。球胴状となる体部には地文に縄文が施され、体部上半に横位沈線と三角陰刻文による変形工字文が配され、下位の2条の沈線がクランク状に上下が繋がる。体部下半には、先端が蕨手状となる斜位沈線が口縁部の波状突起下に配され、球胴の下端に横位沈線が施される。なお、球胴部の地文は横位回転の細い斜縄文(L)であるが、その下端の横位沈線付近には斜位回転の横走縄文(L)が施されている。内面は横位の弱い研磨を施す。この球胴部下端の横位沈線と縄文の施文方向の違いは、報告書第40図26や第61図298等の特徴に極めて近似しており、下部にはさらなる器形が続く可能性が高く、鉢形の器形とは異なると思われる。

第61図290は、復元線を示した図であったが、改めて図を取り直した。口縁部は6単位の波状口縁となり、短い口・頸部は研磨の施された無文で、頸部下端は頸部側が低い段となる。球胴状となる体部には地文に縄文が施され、体部上端に横位沈線が1条巡り、その下の球胴部に斜位沈線が口縁部の波頂下に配される。なお、球胴部

の地文は横位回転の細い斜縄文(LR)であるが、その下部では斜位回転の横走縄文(LR)が施されている。内面は横位の研磨を施す。この球胴部下端の器厚が増し、やや下方に器形の変化が窺えることと縄文の施文方向の違いから、報告書第61図298等と同様な下部器形が続く可能性が高く、鉢形の器形とは異なる。

第62図307～309は、同一個体として3点の拓本図を掲載していたが、接合することが判っていた資料であり、改めて図を取り直した。色調は黒褐色～赤褐色をなす。僅かに外反する口縁に4単位の双頂となる波状突起を有し、口唇部に細かい刺突を施す。短い口・頸部は無文。頸部下の体部上半は球胴状を呈し、下半は直線的に窄まる。体部文様には、口縁の波頂間下に縦位の綾杉状沈線を2列描いた方形の沈線区画で体部文様を縦位に4分割し、波頂下の文様として頸部と体部の区画となる4条の横位沈線、その下の最大径位置に周囲を縁取った内部4条の沈線による弧状ないし半円状の文様、さらにその両脇には周囲に刺突を施した中央が凹状の円形貼付文を配する。体部下半の文様には、綾杉状沈線をもつ縦位区画で分割された区画内に、6重の円文が沈線で描かれる。なお、内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。

第62図318は、器形を改めるべく図を訂正した。平口縁で体部上半から口縁部にかけて朝顔状に外反し、口縁下の文様には横位沈線と弧状沈線及び陰刻文による変形工字文が施される。体部下半は無文で丁寧な研磨が施される。また、口縁部内面には、横位沈線を1条巡らせる。

第71図477は、同一個体の口・頸部であり、接合はしていないが器形を改めて図化し直した。口唇に浅い押圧を加え、口縁は小波状となる。口縁部は僅かに外反し、口・頸部に縦位の条痕文を施す。頸部とは、横位沈線によって区画され、体部上位に3条を単位とした横位沈線区画と、その間に陰刻文をもつ交互三角区画文が配される。なお、内面は横位のナデ調整を施す。

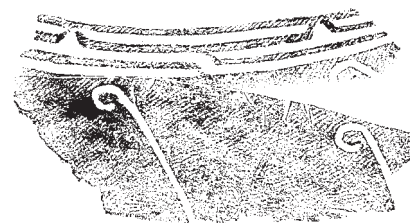
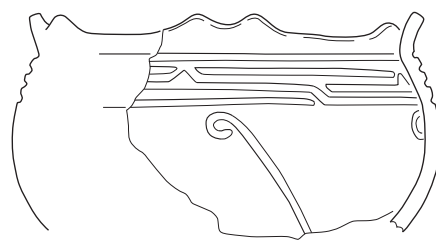
第71図478は、同一個体の口・頸部であり、接合はしていないが器形を改めて図化し直した。土器の色調は明赤褐色で、器厚はやや薄く、硬質。平口縁で、口唇に刻みが施され、口・頸部が僅かに外傾する。口縁下には3条の横位沈線が巡り、頸部下端には4条の横位沈線を巡らせて頸部を区画する。施文される頸部文様は、上下端に綾杉状沈線を持つ1条の縦位沈線を中央に、その両側を3条単位の縦位沈線で区画した文様を頸部の前後に配し、その一対の文様間を4条単位の横位沈線で3段に施文する。なお、内外面は丁寧に研磨され、さらに外面には赤彩が施される。

(2) 図2の訂正図の土器

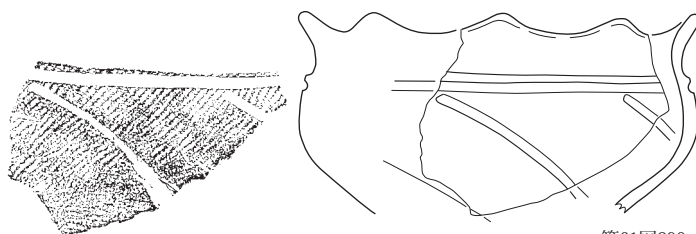
第72図496は、器形を改めるべく図を訂正した。土器の色調は灰黄褐色で、器厚は薄く、硬質。壺形土器の体



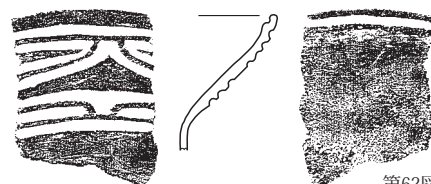
第58図261(1/4)



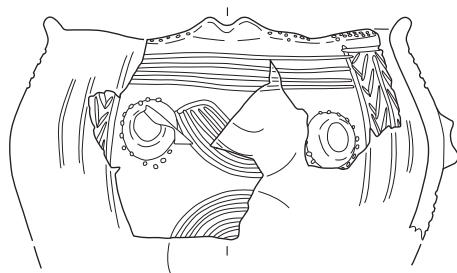
第61図289



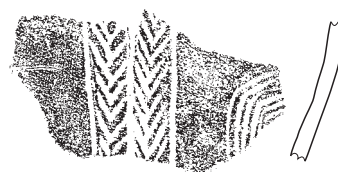
第61図290



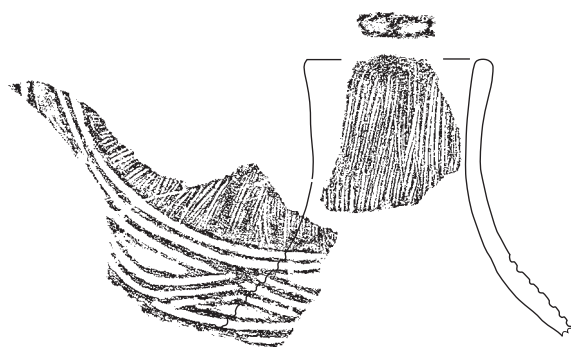
第62図318



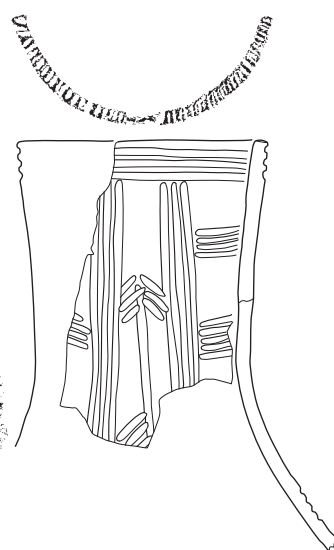
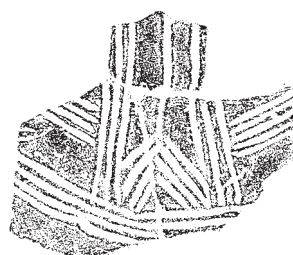
第62図307・309



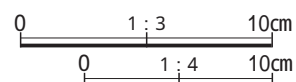
第62図308



第71図477



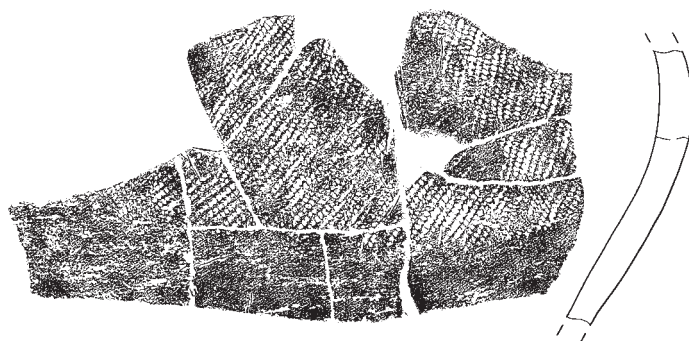
第71図478



第1図 訂正図(1)



第72図496



第73図498



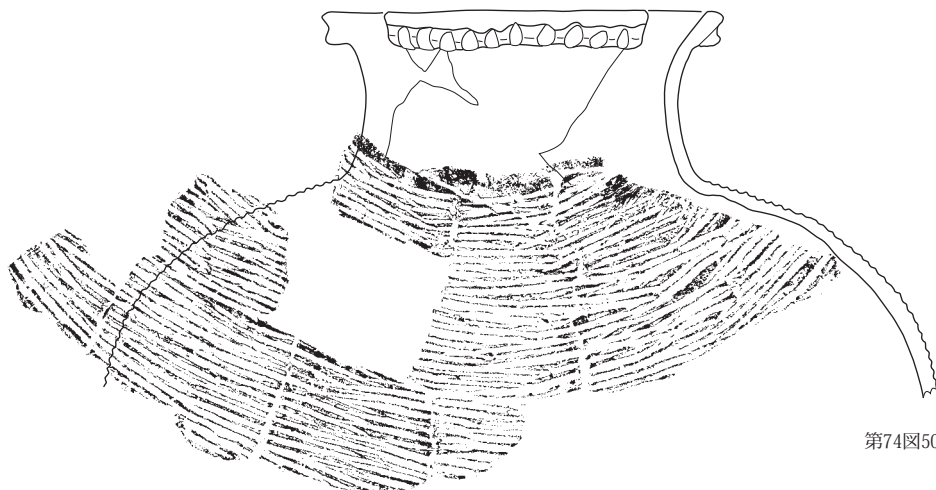
第73図500



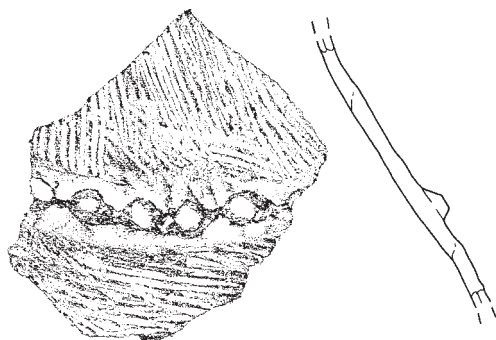
第73図501

0 1 : 3 10cm

第2図 訂正図(2)



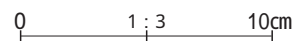
第74図504



第75図519



第76図528



第3図 訂正図(3)

部の大型片で、頸部下端が僅かに残存する。頸部は無文で、頸部下端は頸部側がやや低い段となり、頸部と体部を区画する。体部は球胴状を呈し、上端には上位に横位短沈線と刺突文を交互に配した横位沈線が巡り、以下は平滑なナデ調整の無文。内面は、横位のナデ調整を施す。

第73図498・500・501は、天地逆で報告したため、図を訂正した。498は、土器の色調が黒褐色で、器厚も厚い。球胴状となる体部上半には横位回転の斜縄文(LR)を施し、下半は弱い研磨を加えた無文となる。内面も横位の弱い研磨が施される。

500は、土器の色調が橙色で、器厚の厚い体部片である。体部の最大径付近で強く屈曲し、貝殻腹縁による幅広い条痕文を屈曲上位では右下がりの斜位に、屈曲下位では縦位に施している。内面は平滑なナデ調整を施すが、屈曲部に横位条痕文が僅かに残る。

501は、土器の色調が鈍い黄橙色で、器厚の厚い体部

片である。体部には細く密接した条痕が施されるが、体部の最大径付近で条痕文の施文方向が変化する。体部上半は横位ないし左下がりの斜位に、下半は斜位に施される。内面は、横位のナデ調整となる。

(3)図3の訂正図の土器

第74図504は、報告書掲載の図が実物と異なるため、改めて図を取り直した。胎土に大粒の石英が目立ち、土器の色調は鈍い黄橙色で、器厚はやや薄く、硬質。施文される文様は、外反する口縁部の口縁下に押圧を施した突帯を1条巡らせ、直立ぎみな頸部は無文で縦位のナデ調整。肩部の張りぎみな体部上半には、横位にやや幅広い貝殻条痕が施される。内面は弱いナデ調整で、凹凸状に輪積み痕が残る。

第75図519と第76図528は、天地逆で報告したため、図を訂正した。519は、土器の色調が鈍い黄橙色で、器厚

が薄く、硬質。頸部下半から体部上半の破片で、押圧を連続した突帯を横位に1条巡らせて頸部と体部を区画し、頸部には斜位、体部上半には横位のやや太目な条痕文(貝殻ではない)を施す⁽²⁾。内面は、弱いナデ調整を施す。

528は、土器の色調が鈍い黄褐色で、やや小型な壺形を呈する。頸部下端から体部の球胴下にかけて幅広い貝殻条痕文が斜位に施される。内面はナデ調整を施す。

他に、図示していないが、第59図274を再度観察した結果、胴部下半の縄文部に、胴上部文様帯から帯状に焼成後の赤彩のあることを確認した。

3. 出土した他地域系の土器群

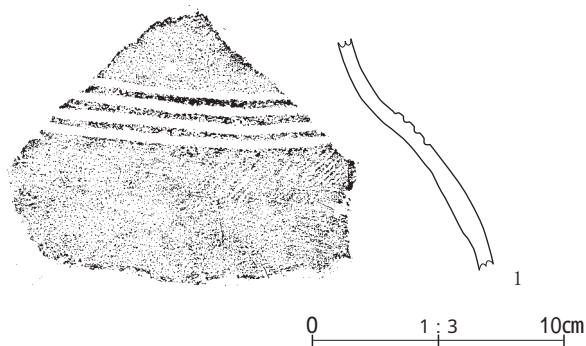
他地域系土器の存在については報告書でも若干触れたことではあるが、その後の土器見学会を含めた土器の再見により、多くの新たな知見を得ることができた。ここでは、その一部の資料について触れておきたい。

(1) 西日本系の土器群

所謂、遠賀川式土器に系譜を持つ土器である。報告書では第74図503の1点を挙げていたが、その後の再見により新たな資料を確認した。図4に示す土器である⁽³⁾。

図4-1は、壺形土器の頸部下端から体部上半片で、胎土には細砂を多く含み、焼成は良好。色調は褐橙色で、表面に明灰色斑がある。頸部はナデ調整による無文で、頸部下端は頸部側がやや低い段となり、頸部と体部を区画する。体部は球胴状を呈し、上端には断面U字状の横位沈線が巡り、以下の体部上半には横位のナデが施されるが、部分的に斜位のハケ目が残存する。内面は、横位のナデ調整を施す。

他に、遠賀川系と考えられる資料として、本稿図2に示した壺形土器となる第72図496がある⁽⁴⁾。



第4図 新資料

(2) 北陸系の土器群

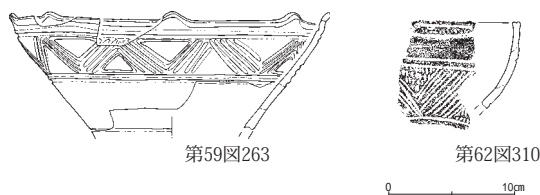
東海系や南東北系の土器はもちろんであるが、北陸系の土器群の存在も明らかとなってきた。それが乾式土器であり、乾式に後続する柴山出村式土器である。

〈乾式土器〉

乾式は石川県乾遺跡出土土器を標識に、2003年に鈴木正博氏によって設定された土器型式である⁽⁵⁾。乾遺跡については2冊の調査報告書が刊行され、近年においても論考が発表されている(湯尻2020、2022)。

報告書掲載土器の中にも、僅かに見受けられる。第59図263と第62図310の2点である。263は小波状突起を有する平口縁で、口縁下に2条単位の横位沈線を上下に巡らせて文様帯区画し、区画内に3～4条単位の沈線で横位に鋸歯文を描き、以下は無文帯となり下端に横位沈線が巡る。なお、鋸歯内の上下の三角部が磨き窪められている点は特徴的である⁽⁶⁾。口縁部内面に横位沈線が巡り、内外面に赤彩を施す。もう一方の310は、口唇に沈線、口縁直下に浅い刻みと横位沈線を巡らせ、その下を無文帯とする。無文帯下には2条単位の横位沈線を上下に巡らせて文様帯区画し、区画内に細い沈線を重畳させて横位鋸歯状に施文し、三角部内に刺突を充填する。

以上、2点は共に横位鋸歯状の文様を共有する類で、同様な文様は他に見られない。ただ、第47図112-1にも体部上半の区画内に3条単位の沈線による鋸歯文を見るが、現段階では乾式の類に含めずにおく。



第5図 万木沢B遺跡出土の乾式土器

〈柴山出村式土器〉

柴山出村式は石川県柴山出村遺跡出土土器を標識に、弥生時代初頭の土器として設定され、湯尻修平、久田正弘の両氏により詳細な検討(湯尻1983、久田1984)がなされている。その後の資料の増加に伴い、中部圏での沈線紋系土器や沈線渦巻文土器の分布や変遷といった研究が、永井宏幸氏をはじめとする多くの研究者によって進められ、新潟県上越地域や長野県内にまで分布していることが知られている。

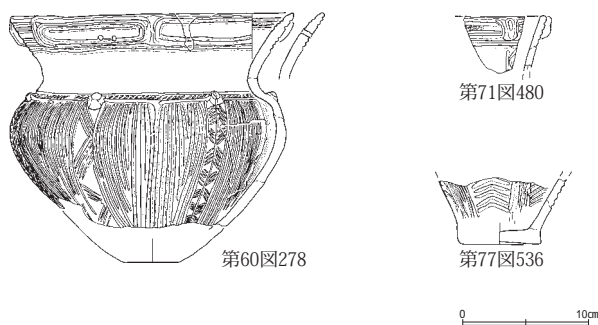
報告書掲載土器の中にも、見受けられる⁽⁷⁾。

図6に示した第60図278は、口縁部が強く外反し、頸部が短く括れ、体部上位に最大径をもつ器形を呈する。

口縁部は下端を2条の沈線を巡らせて画し、縦位突起を境とした沈線による楕円文様を7単位配し、1対の小孔を楕円文様内にもつ。口縁部内面にも、4条の横位沈線が巡る。頸部は無文。体部上半の肩部には、7単位の瘤状小突起を配した後に横位沈線と沈線間に斜位沈線を小突起間に施文し、頸部無文帯と胴部文様を区画する。胴部文様には、肩部の小突起を基点とした沈線による縦長区画を配し、その縦長区画内に上下に対向する綾杉状沈線、下方向の綾杉状沈線、縦位鋸歯状となる雷状の沈線を複数条で描き、その縦位区画間を縦位沈線が充填される。しかも、充填される縦位沈線は各縦長区画間で二分されるように、上端部の中間に縦長な三叉文が配される。なお、この278は、第41図29として掲載した波状口縁をなし、口頸部が無文で体部に細い斜縄文を施文した甕形土器と共に出土している。

また、本稿図2に再提示した第62図307・309、308および第71図478の2点も、この柴山出村式に類される。307～309の体部には縦位の綾杉状沈線と沈線による渦巻文が描かれ、478の長頸部には縦位区画された区画内に綾杉状の文様が描かれている。さらに、図6の第71図480は、長頸となる壺の口縁部に縦位刺突をもつ縦長な小突起を配し、小突起間に沈線で長楕円状の文様を描き、下端に2条の沈線を巡らせて文様帯区画する。口縁部小突起下の頸部には、沈線で縦長区画した区画内に綾杉状沈線を描くようである。第77図536は体部下半から底部で、体部文様が下端まで及び、沈線による縦位区画と区画内に上方向の綾杉状沈線、縦位区画間に縦位の条線が施されている。底面は木葉痕をもつ。

以上、数は少ないが、縦位の綾杉状沈線を特徴とする柴山出村式土器の存在が明らかとなり、併せて沈線渦巻文を描く土器も出土していることも判明した。これらの土器群の出土は、群馬県内はもとより、関東地域でも初例である。むしろ、その分布域が、さらに東へと広がっていることを意味しており、その変容の実態を明らかにすることが今後の課題となる。



第6図 万木沢B遺跡出土の柴山出村式土器

4. 土偶・鯨面土器図の訂正

報告書掲載した土偶・鯨面土器図の訂正にあたっては、本稿の図7に掲載図と遺物Noで示した。以下に、図の訂正内容と土器観察を記す。

(1) 土偶の図の訂正

第88図1は、体部との接続箇所の観察から、改めて図を取り直した。中実土偶の頭部であり、顔面はやや上方を向く。平坦な顔面は卵型を呈し、眉と鼻はT字状に貼付文で、目は浅い刺突、鼻孔にも浅い刺突、そして口は沈線で逆三角形状に表現する。また、顔面の両脇の眉付近から頬辺りにかけて、細かな刺突文を帯状に配しており、黥面の可能性をもつ(髭の表現とは異なる)。耳は、顔面の後ろ側となる頭部両側面に弧状の貼付文で表現し、さらに下方(耳朶)に小孔を穿つ。但し、左耳は欠損。顔面の裏側には、頭部と頸部が残存する。頭部となる頭頂部から後頭部にかけては、欠損部分の観察から、大きく出張っていたことが窺える。また、後頭部下端には隆線が横位に付く。その下方、耳部の位置から下方は頸部となり、頸部中央には帯状に垂下する刺突が施されている。全体に研磨が施された丁寧な作りで、顔面裏側となる耳部周辺に赤彩が僅かに残る(顔面には赤彩の痕跡はない)。

なお、欠損しているものの、後頭部が出張る特徴から、後頭部結髪土偶と考えられ、この時期の土偶としては県内で初例となる。

(2) 鯨面土器図の訂正

第92図1～6は、各破片の観察から、改めて図を取り直して訂正する。

第92図1は、鯨面の付いた土器の体部片である。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は褐色を呈する。鯨面部が破片の大半を占める。鯨面部は、径約3.3cmの低い円板を顔面とし、顔面中央の上方に縦位貼付で鼻を表現し、その下端に刺突で鼻孔を現す。この鼻を中心に、鼻の両脇に目、下位に口を刺突で現す。さらに、鼻の下端を頂点に口を中央とした菱形となる沈線、両目の目尻脇から外側に広がる三角形となる沈線を配して縁取り、鼻と菱形および三角形以外の部分に細い沈線で斜格子の文様を充填する。また、鯨面部の外側に僅かに残る土器の表面にも、斜格子状の細沈線による文様が施されている。破片の内面には弱いナデ調整を施す。なお、外面には鯨面部を含む破片全体に赤彩が及ぶ。

第92図2は、鯨面の付いた体部片である。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。鯨面部が破片の大半を占めるが、鯨面部の両側に土器の体部が少しずつ残存する。鯨面部は、径約3.0cmの低い円板を顔面とし、顔面中央の上方に縦位貼付で鼻を表現し、

その下端に刺突で鼻孔を現す。この鼻を中心に、鼻の両脇に目、下位に口を刺突で現す。さらに、顔面部の左右両縁には、口周辺には鼻の下端を頂点とした菱形に、両目の目尻脇から外側に広がる三角形を残すように、対向する複数の斜位細沈線で施文する。また、鯨面部の外側に残る土器の表面にも文様が及ぶ。鯨面部の両側には斜格子状の細沈線が施され、鯨面部下には太い斜位沈線で鯨面直下の無文部を区画する。内面は弱いナデ調整を施す。なお、外面の鯨面部を含む破片全体に赤彩が及ぶが、鯨面直下の無文部は赤彩していない。

第92図3は、鯨面の付いた体部片である。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。鯨面部が破片の大半を占めるが、鯨面部の右側から下部にかけて土器の体部が残存する。鯨面は先の2とほぼ同様で、径約3.0cmの低い円板を顔面とし、顔面中央の上方に縦位貼付での鼻と刺突による鼻孔を表現し、鼻の両脇に目、下位に口を刺突で現す。さらに、顔面部の左右両縁には、口周辺への菱形、両目尻脇に位置する三角形を残すように、対向する複数の斜位細沈線を施す。また、鯨面部の外側に残る土器表面の文様には、鯨面部の脇には斜格子状の細沈線が施され、鯨面部下には太い斜位沈線で鯨面直下の無文部を区画する。内面はナデ調整を施す。なお、外面の鯨面部を含む破片全体に赤彩が及ぶが、鯨面直下の無文部は赤彩していない。

第92図4は、土器の体部片である。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。押圧を加えた隆帯を体部の最大径位置に横位に巡らせて体部の上下半を区画し、途中の数か所に縦位に貫通させた小孔を有する。体部上半には細沈線による斜格子状の文様を施し、下半にはやや太い沈線を縦位条痕状に施文する。内面はナデ調整を施す。なお、外面の押圧隆帯を含む体部全体に赤彩が及ぶ。

第92図5は、体部の上半片である。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。体部の上半下端には4と同様な縦位小孔をもつ隆帯が巡り、上半には細沈線による斜格子状の文様と、太い斜位沈線で区画された無文部をもつ。内面は弱いナデ調整を施す。なお、外面の押圧隆帯を含む体部上半に赤彩が及ぶが、無文部には赤彩されていない。

第92図6は、土器の体部片である。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は褐色を呈する。4と同様に体部最大径位置に押圧隆帯が巡り、体部の上半は無文、下半は縦位の条痕状となるやや太い沈線が施される。内面は弱いナデ調整を施す。なお、外面の押圧隆帯を含む体部下半には赤彩が施されるが、上半の無文部には赤彩されていない。

なお、再観察による各破片の上下方向が確定した段階で、接合を試みたところ、鯨面部と土器の体部との接合

を確認した。その接合の状態からすると、鯨面を有する土器の器形は、壺形土器ではなく鉢形土器となるようである。また、上記6点は、同じグリッド内からの出土であること、同様な胎土・色調・焼成であること、鯨面付き破片での体部文様および体部破片での圧痕隆帯や施文文様がそれぞれ同様であることから、これらは同一個体と考えられる。接合図を含めたその詳細については、後日に記したい。

5. おわりに

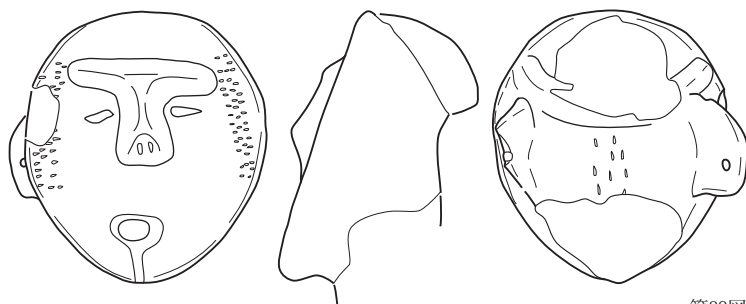
刊行された万木沢B遺跡の報告書に関する掲載遺物図の不備について、その訂正を目的としたのが本稿であるが、報告書刊行後の遺物見学会等を通じて、新たな視点からの遺物への理解が深まってきた。

万木沢B遺跡の西側に位置する縄文時代後期後半から晩期後半にかけての唐堀遺跡、その唐堀遺跡に後続する縄文時代晩期終末から弥生時代前期にかけての遺跡として万木沢B遺跡を認識して報告したが、この時期の見識が至らず、報告書掲載土器への理解が足りなかった。

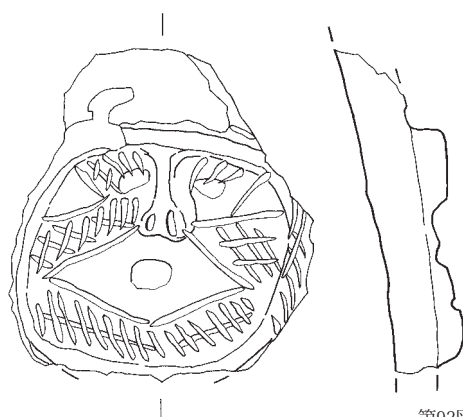
改めて見返してみると、千網式や氷式をベースとした在地土器に、東海系の条痕文土器、西日本系の遠賀川式土器、北陸系の乾式土器や柴山出村式土器、南東北系および日本海側(新潟県中・下越)からの緒立式土器、そして東関東系の荒海式土器の存在が明らかとなってきた。このことから、遺跡地の地域における縄文時代から弥生時代の変遷には、周辺各地からの土器が絡んだ様相が明らかとなり、縄文時代晩期後半以前の土器にも同様な現象が起きていないか検証する必要性もでてきた。事実、当事業団での令和4年度最新情報展第1期で展示された唐堀遺跡出土土器の中に、北陸系の土器が含まれていることを実見した。また、近年、長野県では塩崎遺跡群からの遠賀川系土器や柴山出村式土器の出土が紹介されており、柴山出村式土器の分布東縁における様相を検討する必要性がある。

一方、図7-1(第88図1)の後頭部結髪土偶は、関東での縄文晩期終末から弥生時代前期に併行する東海地方から中部高地の地域に多く出土することが知られ⁽⁸⁾、万木沢B遺跡例はその東限にあたる。この存在も、土器だけではなく多くの事象が東海系の影響を強く受けていることを示している。

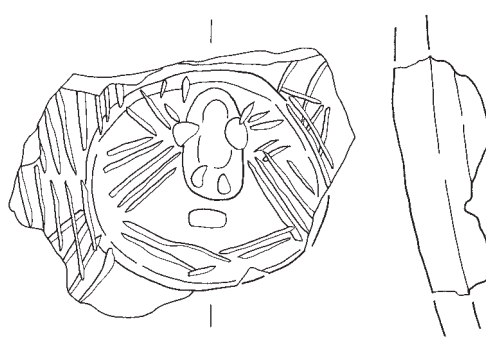
文末となるが、万木沢B遺跡出土遺物に関するコメントやご教授いただいた石川日出志氏をはじめとする遺物見学会に参加された多くの皆様、および資料調査を行っている根岸洋氏をはじめとする資料調査へ参加する皆様、そして遺物見学会の準備や資料調査にも参加している関根史比古氏に記して感謝する。



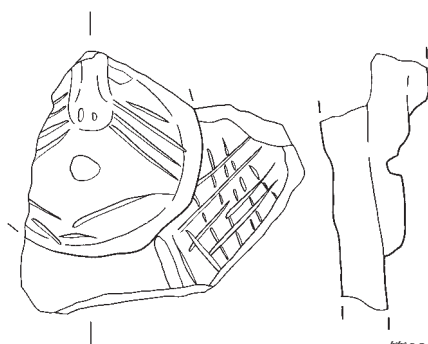
第88図 1
S=1/2



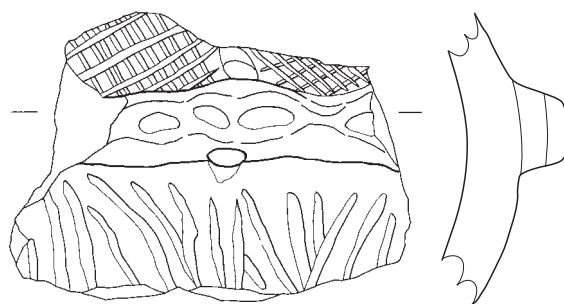
第92図 1



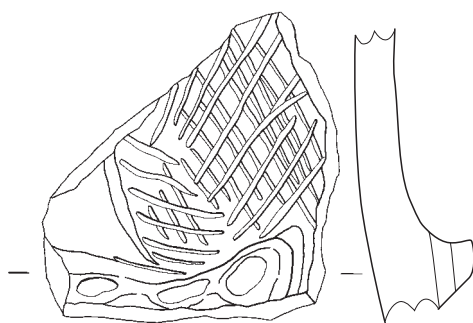
第92図 2



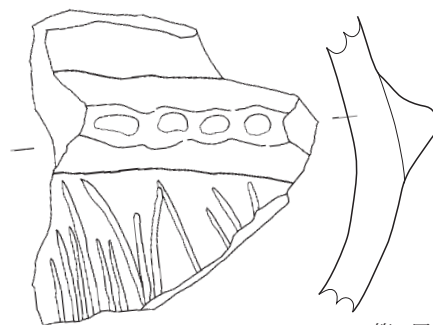
第92図 3



第92図 4



第92図 5



第92図 6
S=1/1

第7図 訂正図(4)

研究紀要41

註

- (1) 万木沢B遺跡の出土土器については、整理段階から一部の研究者間で話題になっていたが、報告書刊行への時間的な兼ね合いから検討作業はほとんどできなかった。報告書の刊行後、遺物見学会を要望する声が高まり、石川日出志氏を中心に令和4年9月4日に当事業団内で開催された。また、見学会には、参加した各地域の研究者から多くのコメントが寄せられた。
- (2) 施文された条痕については、永井宏幸氏から貝殻による条痕ではないとのコメントを頂いた。520・522も同様である。併せて、貝殻は搬入品の可能性との指摘もあった。
- (3) この新資料は、当事業団での資料調査中の根岸洋氏のグループによって見出された資料である。遠賀川式土器の群馬県内出土例は少なく、その重要性から本稿に掲載することとし、収納についても報告書掲載資料と同様に扱う予定である。
- (4) 「遠賀川系壺の、前期最終末の胴長の器形に近い。」として、石川日出志氏からコメントを頂いた。
- (5) 鈴木正博 2003「亀ヶ岡式」から「遠賀川式」へ―「文様帯クロス」関係から観た弥生式形成期の複合構造と相互の密結合―『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- (6) この三角部が磨き窪められている点について、石川日出志氏より乾式に近似するとのコメントを頂いた。併せて、310も同様とのことである。
- (7) 見学会の際に、石川日出志氏や永井宏幸氏からコメントを頂いた。また、長野県でも新資料が出土しているとの情報を得た。
- (8) 2022年1月に開催された第18回土偶研究会豊橋市大会での前田清彦氏の発表で示された東海地方の晩期土偶編年案による。

主要引用・参考文献

- 荒巻 実・設楽博己 1985「有髯土偶小考」『考古学雑誌 71-1』日本考古学会 pp.1-22
- 石川日出志 1987a「12.土偶形容器と顔面付土器」『弥生文化の研究 8』雄山閣 pp.160-164
- 石川日出志 1987b「人面付土器」『季刊 考古学 19』雄山閣 pp.70-74
- 市川孝之 2022「(3)塩崎遺跡群・石川条理遺跡・長谷鶴前遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター 年報 38』pp.25・26
- 岡本恭一 2001『松任市乾遺跡発掘調査報告書 A・C区下層編』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 黒沢 悟 1997「東日本の人面・顔面」『考古学ジャーナル No.416』ニュー・サイエンス社 pp.11-16
- 小村 茂・上野与一 1975「石川県加賀市柴山潟底貝塚出土の弥生式土器」『石川考古学研究会々誌 18』pp.90-92
- 設楽博己 1990「線刻人面土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告 25』pp.31-69
- 設楽博己 1998「鯨面の系譜」『氷遺跡発掘調査資料図譜 第三冊』氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会 pp.153-164
- 設楽博己 1999a「土偶形容器と鯨面付土器の製作技術に関する覚書 ―複製品の製作を通じて―」『国立歴史民俗博物館研究報告 77』pp.113-126
- 設楽博己 1999b「鯨面土偶から鯨面絵画へ」『国立歴史民俗博物館研究報告 80』pp.185-202
- 設楽博己・石川岳彦 2017『弥生時代人物造形品の研究』同成社
- 設楽博己 2021『歴史文化ライブラリー 514 顔の考古学』吉川弘文館
- 設楽博己 2022「近畿地方における鯨面の消長」『纏向学の最前線 ―桜井市纏向学研究センター設立10周年記念論集―』(纏向学研究センター紀要『纏向学研究 10』) pp.35-42
- 永井宏幸 1994「沈線紋土器について」『朝日遺跡V』(財)愛知県埋蔵文化財センター pp.363-375
- 永井宏幸 2017「三遠南信の大地式土器 ―隣接地域からかんがえる―」『三遠南信周辺における中期弥生土器と交流 資料編』地域と考古学の会 pp.157-162
- 久田正弘 1984「柴山出村式土器の再検討」『史館 16』史館同人 pp.85-96
- 久田正弘 1988『八田中遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 久田正弘 1998「北陸地方西部の土器の動き」『氷遺跡発掘調査資料図譜 第三冊』

氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会 pp.111-125

- 藤田邦雄・湯尻修平 2010『白山市乾遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 前田清彦 2202「発表5 晩期の土偶について」『第18回 土偶研究会 豊橋市大会』土偶研究会 pp.39-48
- 安 英樹ほか 2002『柴山貝塚・柴山出村遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 湯尻修平 1983「柴山出村式土器について」『北陸の考古学 ―石川考古学研究会々誌 63―』pp.233-255
- 湯尻修平 2011「沈線渦巻文土器について」『石川考古学研究会々誌 54』pp.11-30
- 湯尻修平 2020「乾式土器について(その1)」『石川考古学研究会々誌 63』pp.19-36
- 湯尻修平 2022「乾式土器について(その2)」『石川考古学研究会々誌 65』pp.1-16

図出典報告書

- 谷藤保彦 2022『万木沢B遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団